

2021年2月度総評（浦歌無子）

今月も多くの投稿があり、読み応えがありました。印象に残る作品もたくさんあり、詩を読む醍醐味をさまざまに味わうことができました。

むしょく、って子供が言えば
傾いた万華鏡から零れるひかり
燦嗣いとり（愛知県）

ひらがなの「むしょく」という語のふくらみ。そのふくらみによって呼び起こされた「ひかり」は繊細で豊か。

ひさしぶり、
雨音だけじゃたりないよ、
ひかっているところがきみだね、
そうだね
白野（新潟県）

「きみ」への想いが、雨粒に宿る光に目をとめさせる。明るさのある願いがみずみずしい。また、やわらかな思いと語の調べが調和していて魅力的です。

あの日海岸に立ったさざ波が
今日の僕たちだったりする
いけす（東京都）

生命の神秘、時間の秘密、世界の成り立ちについての夢にうながされます。

明日の髪型を思えば
鏡台のわたしに
春が傾いている
さいう（愛知県）

明日なにか嬉しい予定があるのでしょうか。その予定のための髪型。「鏡台」と「春」の取り合わせが、華やかな味わいをももたせています。

刺されたら死んでしまう
生き物の尾のあたりに
僕はいた
梁川 梨里（群馬県）

「刺されたら死んでしまう」の緊迫感よりも「生き物の尾のあたり」のおかしみがより印象的で、不思議な「生き物」に運命をゆだねているかのように響いてきました。「僕」が小

さくなつたのか「生き物」が巨大なのか。サイズ感のわからなさにも惹かれます。

「ばんぺいゆ」って
唱えてすぐに
夜の底

暮田真名（東京都）

「ばんぺいゆ」は<晩白柚>と書きますね。夜に召喚されるための呪文のような「ばんぺいゆ」。「夜の底」はきっと白くて丸い。言葉そのものが持つ不思議な力を思います。

せつなさに閉じ込められた邂逅の
ついでにカップ麺とかキスとか

白野（新潟県）

2人で食べるカップ麺も交わすキスもぜんぶ「せつなさに閉じ込められ」ている。恋する二人の時間とはそういうもの。「ついでに」という言葉に「せつなさに閉じ込められ」ていることを忘れるために恋人同士というのはいろんなことをしてみるのかもと思えてきました。

タシーン
タシーン
アスファルトにボール跳ねて
青空と
まだ冷たすぎるサイダー

春町 美月（大阪府）

肌寒さの残る早春。「タシーン」のオノマトペも巧みです。勢いよく跳ねる「ボール」、ひろがる「青空」、弾ける「サイダー」。春を迎える心の弾みが伝わってきます。

サバンナの動物はみな痒そうだ
清浄な部屋で背中を搔く

呉田 稔（福岡県）

おそらく「サバンナの動物」の映るテレビ番組を視ているのでしょう。物理的な距離以上に人間とその他の動物との生物の種としての遠さが描かれているところが印象的です。

左手で書いてあなたの名を滅ぼす

合川秋穂（京都府）

「左手で書いて」からはじまる意外な展開に惹かれました。「滅ぼす」とは穏やかではありませんが、おまじないのような行為で滅ぼそうとしているのは、「あなた」への<私>の思いなのでしょう。

青が溢れて窓辺に帰れない

青木雅（埼玉県）

「青」の鮮やかな色彩と「窓辺」の持つドラマ性、「帰れない」という心のありようが融合し、印象深い作品になっています。

文集が黄ばんでゆくたび過去に

見た鳥のなきごえがきれいになる

白野（新潟県）

思い出は遠くなるほど美しさが増してゆく。鳥の姿そのものではなく「なきごえ」であるところが、記憶の不思議にも触れつつ、詩の手ざわりを厚くしています。時間が経つということのさびしさと安らぎを同時に感じました。

さんずいと林の間でねむる

足はちょっとはみ出して

藤色（京都府）

<淋しい>という感情が、<淋>の字そのものと身体との組み合わせによって見事に描かれていて感嘆しました。

生きるって何なんだ

と、君に聞くと

誤字を気にすることだよ

って呟く真昼

黒川凜也（大阪府）

「生きるって何なんだ」という大きな命題に対しては些末とも言える答え。意外だけれど、どこか腑に落ちるのは、この「真昼」は二度と巡ってこない「真昼」で、「誤字を気にすること」という答えは、私たちが生きるこの世界の取り返しのつかなさ確かに触れているからなのでしょう。

春雷にページの活字あふれだす

長谷川柊香（宮城県）

「春雷」によって「活字」も芽吹き育つよう。春特有の高揚感にいざなわれます。

こちら操縦席まもなく春の月

細村 星一郎（東京都）

月は見上げるものとばかり思っていました。ぐんぐん近づいてくる月が感動的。語りかけの響きにも、まさしく宙に浮くような喜びが感じられます。

A4のノートにはさまる虫の死を
うすく知らせるひかりのにおい

白野（新潟県）

ページの間にはさまり息絶えている虫、きっと誰もが一度は目にしたことがあるのではないのでしょうか。虫にとってもページを閉じて開いた自分にとっても思いがけない「死」をやさしくつつむ「ひかりのにおい」。

いちごをスプーンで潰す
人間であることの腹いせに

門野あおい（東京都）

いちごをあっさり潰すことのできる自分を含めた「人間」という種への怒りのようなかなしみのようなものが心に残りました。